
魚淵

游

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚淵

【Nコード】

N7073E

【作者名】

游

【あらすじ】

その淵で魚をとる者には必ず不幸が訪れる。そんな魚淵を舞台に、中学生二人の失われた友情を描いた中編小説。

夜も更け、寺へと続く道沿いに立ち並ぶ無数の松明たいまつもあらかた燃え尽き、死にそこなつた夏の虫たちが、暗闇のなか青白い光を放つ街灯にやたらと群がりはじめた。毎年のように繰り返されるそんな夏の夜の光景が、その夜に限って無性に腹立たしく感じられ、思わず目をそらした聡の耳に、最前から鳴り響いていた盆踊りのお囃子の音が突然戻った。どおんどおんと規則正しくゆっくりと打ち鳴らされる遠い太鼓の音が、四年前、ちょうど同じこの夜この場所での出来事をまざまざと思い出し、あのあほんだらがと声にならない声でつぶやく聡の両の耳を静かに打ち続ける。

*

あの夜、達也は笑いながら自分の手の甲に火のついた煙草を押し付けた。遠くからかすかに聞こえてくる盆踊りのお囃子の音以外にも聞こえない静寂の中で、皮膚の焼けるじりじりという音だけが、異様な大きさを立てて震えていた。「おまえ熱あつないんか？」そんな聡の問に、達也はあいかわらず笑みを浮かべたまま、「こんなことして、阿呆みたいやろ」と答える。辺りを肉の焦げる臭気が漂う。「でも、死ぬほどのもんやない」二人を沈黙が包み込んだ。その時聡と達也は、自分たちの母校である中学校の、古びた木造校舎とグラウンドをむすぶ階段の一番上の段に並んで座っていた。二人が顔を合わせたのは中学校の卒業式以来だった。やがて重苦しい沈黙を破り、達也は聡に向かってこう話しかけた。「そーいやお前、きょう誕生日やろ。たしか盆生まれやったよなあ」「おうよ」最後の煙が闇に紛れ、煙草の火が消えたのがわかる。「十七歳か、めでたいめでたい」達也がふざけた調子で言った。

十七年前の八月十五日、終戦記念日に聡は生まれた。死者の魂が

里帰りをするという盆の十五日、一切の靈に謝恩の意を表する施餓鬼会の夜、二人は盆休みを利用してこの暑い土地に帰省していたのだ。中学卒業と同時に達也は就職のため西宮市へ、聡は高校進学のため新宮市へと、それぞれ生まれ育ったこの土地から飛び出していた。そんな二人にとつて、ほぼ二年ぶりの再会の夜だった。その時、二人のすぐ横で、まだ燻っていた松明の破片が強い風にあおられ地面にこぼれ落ちた。その小さな炎が木造の校舎に移り、一瞬のうちに燃え上がる光景を聡は想像した。黙って隣りに座る達也も、二本目の煙草をくわえた口の中で、燃える燃えると密かにつぶやいているのが聡にはわかった。「仕事どうや、たいへんか」思い出したように聡は問い、達也は遠くに見える寺の境内に設えられたお盆の踊り矢倉と提灯の明かりの方にふと目をやりながら、「まあな」と答える。

「ちよつとは成長したか、上司殴ったりしてないやろな」

「一人むかつく奴おつてな、こないだどつきまわしたつたわ」

「おまえなア、そんなことして大丈夫なんか」

「ええんじゃ、あんな奴」と達也は吐き捨てるように言う。

聡は呆れたように、「まったく怖いもん無しやな。いまここに爆弾落とされても、お前だけは生き残れるわ、絶対」と言い、本当にそんな気がし、そうなるはずだと思う。「むちゃ言うな」と言つて達也は笑った。いつのまにか太鼓の音は止んでおり、踊りを終え家路を急ぐ人々の賑やかな声が近づいてくるのがわかった。なぜか急に聡は、その楽しげな声に、無性に苛立ちを感じた。

*

二人が初めて同じクラスになったのは中学一年の春だった。といっても、かつて二人が通つたその学校には一学年一クラスしかなく、それも全校生徒合わせて八十人にも満たない小さな過疎地の中学校だった。この面積だけは広い過疎の土地では、三つの分校と一つの

本校からなる小学校を卒業し、中学校で初めて同学年の子供らが、一つの教室に集まることになるのだ。聡にとつて達也は、小学校時代から気になる存在だった。それは運動会の百メートル走という、今にして思えば些細な競技が発端だったが、それでも幼い聡にしてみれば、一年に一度きりの真剣勝負、一大イベントだといってよかった。町内すべての小学生を集めて一番を競い合う連合運動会で、聡のタイムは毎回判を押したように二番だった。そしていつもその聡の前を走っていたのが達也だったのだ。とにかく頭抜けて足が速いことと、そしてもう一つ、誰よりも喧嘩っ早いことで、達也はこの土地では有名な存在だった。

中学校に入学早々、達也は上級生の一人を殴り倒した。歩く姿が生意気だとなくせつけた三年生に達也は猛然と飛び掛かり、慌て助けに集まったその仲間たち数人に取り囲まれ、血まみれになるまで殴り合い蹴倒された。もともと喧嘩など日常茶飯事という荒っぽい土地柄ではあったが、他人から見れば些細なことにでもすぐ怒り狂い、やたら左の拳を振り上げるぎつちよの達也は、その中でも特に目立った存在であり、血の気の多い連中から喧嘩を売られることもしばしばだった。

そんな達也と聡が初めて喧嘩をしたのは中一の冬のことだった。普段はおとなしくめつたに怒らない聡だったが、一度暴れ始めると手がつけられなかった。取っ組み合い狂ったように殴り合う聡と達也を、級友たちは止めることもできず呆然と見やった。やがて疲れた二人はどちらともなく手を止め、噴き出る口許の血をぬぐった。お前らはシャモじゃ、おなじ西年生生まれでも二ワトリとちゃう、けんか鳥のシャモじゃ、と級友の一人がからかう。それより、一体なんで始まったんな。なにが原因で喧嘩を始めたのか、二人ともすぐには思い出せなかった。「しょうもないことじゃ」聡と達也は顔を見合わせ、それまで以上に親しげに、声をあげて笑いあった。聡は達也の笑顔を見るたびに、どうすればこんなに優しい笑顔に、そして穏やかな目になれるのだろうかと思つた。そんな、達

也がときおり見せる人一倍優しい笑顔には、誰もが惹きつけられずにはいられなかった。それは優しく、そして寂しい笑顔だった。

達也はいつでも独りだった。たとえ友達に囲まれ談笑しているときでも、達也の眼は寂しげで、深く澄み切っており、周りに同化しきれないその様は、まるで小人の国にたった独り迷い込んだガリバーを思わせた。誰を頼るでもなく頼られるでもない。ただそこにいてだけで、場の空気を変えてしまう何か過剰なものを達也は持っていた。少なくとも聡にはそう感じられた。何か過剰なもの。その得体の知れない不思議な力が何に由来するのか、それは聡にもはつきりとはわからなかった。ただ、達也の全身から滲み出ている、一種あきらめにも似た疎外感と、逆になんでも独りで出来るのだという強い自信とが微妙に入りまじった感情が、聡にはうつつすらとだが見える気がした。

実際のところ、達也はなんでも独りでこなした。釣りが三度の飯よりも好きだという達也は、たとえ何も見えない闇夜であっても、そこがどんなに危険な場所であっても、釣竿片手にたった独りで出掛けてゆき、なんなく獲物を手に入れて帰ってきた。覗き込んだだけでも気が遠くなるような崖の下、足場すら見あたらない危険な渓谷、濁流が渦を巻く土砂崩れ直後の谷底。達也に言わせれば、人が近寄らないような場所ほど、大物を釣りやすいのだという。この土地の誰もが避けて通る魚淵ういづみでさえ、達也が釣竿を収め黙って通り過ぎることはなかった。

*

土地に伝わるこんな話がある。

その昔、人里離れた川の上流に一人の高僧が住む小さな古寺があった。高僧は行者か仙人のような人物で、不思議な念力を使い、居ながらにして何でも欲しいものを手に入れることができたという。いつの頃からか、雨が降り始めると決まってその寺を訪れ、寺の少

し下手にある大きな淵の話をしては帰ってゆく妙な男が現れた。その淵の奥には大きく深い穴が空いているといわれ、天気の良い昼間でも、その淵だけは不気味なほどに暗く淀んでいる。寺を訪れるたびに男は、「決してあの淵に鵜を入れてはいかん」とだけ話し、ある時などはその決まり文句も言い終わらぬうちに、雨が上がり晴れ間が見え始めた空に気づき、慌てて帰ってしまったこともあった。高僧はその男が淵の主であろうと見抜いていたが、そのことは誰にも話さなかった。しかし、誰か他に見たものがあつたのか、その不思議な男の噂は村中に広まっていた。

やがて一人の豪気な若者が、「よし、わしが男の正体をあばいてやる」と言い出して村人を集めると、ざぶんと淵に飛び込み、暗い淀みの奥底を目指して潜っていた。しばらく経ち、ゆらゆらと水面に浮かび出てきた若者は、ただ「大きかった」とだけ言い終えるとその日から寝込んでしまい、二度と起き上がることなく死んでしまった。当然のごとく騒ぎはますます大きくなり、とうとうその淵に鵜を入れてみるより他に収まりがなくなつた。もちろん鵜は村でも特別に大きく強いものが選ばれた。村中の人々が見守るなか、鵜は淵の奥深くへと潜っていった。やがて水面に無数の泡と真っ赤な血が吹き出してきた、深紅に染まつた水底から、先程の鵜と、片腕ほどもある巨大な小雨こゆめの死骸が浮き上がってきた。小雨とは一般に甘子あまじと呼ばれる淡水魚の地方名であり、通常なら体長二十センチ前後、三十センチを越えるようなものにもめつたにお目にかかれない。片腕ほどもある小雨とは、なんとも桁外れな大きさである。さすがに村で一番強者の鵜ではあつたが、そんな巨大な小雨相手では、相打ちに持ち込むのが精一杯だったのだ。そしてやはりこの巨大な小雨が淵の主であつたのだらう、その後たとえ土砂降りの雨が降ろうと、あの男が寺を訪れることは二度となかったという。村人たちは祟りを恐れ、二体の死骸を手厚く葬つたが、その一件以来、その淵で魚をとる者には、必ず不幸が訪れるようになった。いつしかその淵はウランブチと呼ばれるようになり、祟りを恐れる村の人々は皆、

その淵に近づくとさえしなくなった。

*

この話は、現在でも土地の者の間では半ば真面目に信じられており、ちょうど魚淵にさしかかった地元釣り人たちは、誰もが自分の身に降りかかる不幸を恐れ、必ず釣竿を収めては足早に通り過ぎた。土地の者たちがそんな言い伝えを信じるのにも、あながち理由がないわけではなかった。実際聡が中学二年生のときにも、たった独りで魚淵に潜り、大物の小雨を銛で十匹も突いてきたのだと言って自慢しはじめた気の強い一人の男が、その夜のうちにバイクごと谷間に転落し変死するという事件が起こった。この土地でギョロメのヨシヤンと呼ばれていたその十八歳の青年は、聡の幼なじみである保生の兄でもあった。その夜、ヨシヤンは酒の席で自分の勇気をさんざん自慢したあげく、周囲の者が引き留めるのも聞かず、へべれけに酔っ払ったままバイクにまたがり家路についた。そして次の日の早朝、ヨシヤンは頭から川原に突き刺さり、硬直した体を天に向かってぴんと突き立てた格好で発見された。診療所の年若い医師の話によれば、間違いなく即死だったろうとのことだった。粉々に壊れたバイクの破片、両の足を真つすぐ天に向けそり立つ男の死体。それはなんとも異様な光景だった。土地の者たちは皆、これはきつと魚淵の祟りに違いないと信じ、たとえヨシヤンが酒を飲んでいなくても、この事故は起きたのだと言い合った。

そんなものただの迷信だと笑い飛ばし、かたくなとも思えるほどに魚淵での釣りにこだわっていた達也にしる、実際釣りの最中に二度も右腕を骨折していた。といっても、達也は毎週のように釣りに出掛けているのだし、どちらも負傷したのは魚淵とは全く別の岩場であったから、骨折が祟りによるものなのかどうか、本当のところは誰にもわからなかった。とにかく全てを魚淵の祟りだと考えたがる土地の大人たちの心配など一向気にせず、達也はいつも、まるで

何かに吸い寄せられるかのように透き通る溪流へ、そして深く淀む魚淵へと出向いて行くのだった。

冬をまたぐ長い禁漁期間が終わり、小雨や鮎の解禁日がやってくる初春からお盆にかけてが、この土地の最も賑やかな季節だといえる。紀伊半島の南の果て、本州最南端の潮岬から、それもまだ自動車で一時間以上も山中に入らなければならぬというのに、毎年解禁日には多くの釣り人たちが方々から集まってき、土地の者に混じって数メートルおきに釣り糸を垂らす。

大山椒魚が川底を這い、石班魚うぐいや小雨などが群れをなし泳ぐこの土地の清流は、確かに溪流釣りにはもってこいの環境だった。その流れは、かなり深い場所でもはつきり川底が見えるほどに冷たく透き通り、魚たちの姿をくつきりと水面に映し出す。瀬から淵へと岩づたいにしぶきをあげ流れ落ちる清水によってつくりだされた無数の泡の下では、まるで淡青色の和紙に朱や黒の墨汁を散らしたかのように美しい小雨が餌を待ち、小さな口を開けてゆつくりと泳ぎ回っているのが見える。川下からその美しい獲物を狙い釣り餌を流し入れる時の心地よい緊張感に、達也はいつも身震いを押さえ切れぬ。熟練した竿さばきで思い通りのポイントに餌を沈め、静かに当たりを待つ。糸の動きが止まり、つゝと流れに逆らい動き始めた瞬間、くつと釣竿を持ち上げ合わせる。一度逃せば、二度とその日、その同じ場所で鉤に掛かることはないと言われるほど警戒心の強い小雨だからこそ、最初に釣竿を持ち上げるタイミングが肝心なのだ。合わせが早すぎれば、鉤がしつかりと掛からず逃げられてしまう。遅すぎれば小雨が先に暴れだし、他の獲物にまでいらぬ警戒心を起こさせてしまう。達也はいつも絶妙のタイミングで竿を操った。それは見事な技だった。川虫の中に仕込まれた鉤の返しが、測ったように同じ部分をとらえるのだ。と同時に糸がぴんと張り、川魚の小さな体に似合わぬ強い引きが達也の左腕を襲う。予想以上にしなる釣竿越しに、精一杯抵抗し逃れようとする獲物の重みを感じるその時が、達也にとって、何物にも替え難い至福の瞬間なのだ。その瞬

間、時は止まる。それはほんの一瞬でありながら、永遠の時間が流れ過ぎたかのような錯覚を達也に与える。静かに、なめらかに、密やかに、永遠の時間が流れ去る。だが、やがて獲物を手中に収め、その不思議な刹那の錯覚から、あいかわらず自分を取り巻き包み込んでいるこの騒がしい生の現実へと引き戻されるたびに、達也は、一瞬はやはり一瞬でしかありえないのだという、しごく当たり前のことを今さらのように思い知らされ、至福の時間がすでに過ぎ去ってしまったことを齒痒く感じるのだ。しかしその齒痒さも長くは続かない。時は決して途切れることなく、そして誰をも待つことなく流れ続ける。釣り上げた獲物を魚籠に入れ、釣鉤に新しい餌をつける頃には、再び達也の胸は、掛け替えのないあの永遠の瞬間を求め沸き起こる、期待感と緊張感で一杯になっているのだ。

*

一心不乱に魚淵の水面を見つめる達也の姿が、聡には大学生となつた今でも手に取るように想像できた。高校から予備校。そして大学。たまたま東京都内の大学に入学はしてみたものの、当面の目標もなにも特に見当たらない。切羽詰まった生活があるわけではなく、毎日がさしたる変化もないまま、ただなんとなく時間だけが過ぎてゆく。そんな日常にふつと嫌気がさすとき、必ずといっていいほど達也のことが思い浮かぶのだ。釣り三昧、喧嘩三昧の日々。そして突然の就職。聡はこれまでに多くの人々と出会ってきたが、達也に似ている者は一人もいなかった。誰もが冷めた目で社会を見つめ、誰もが熱く自分だけの夢を語る。しかし達也ほど冷め切った者も、そして達也ほど激しく生き急ぐ者もない気がした。

「俺たちが何をしようと、この社会はこれっぽっちも変わらないのさ」

聡の通う大学近くの居酒屋では、店内のほとんどを占めている大学生たちの誰もが、ビール片手にそう言い合っていた。

「何をやっても無駄なんだよ。僕たちはみんな、働きアリみたいなもんさ。ただ働き続けて、ある日突然、死ぬんだ」

近い未来のことを頭に思い浮かべながら、傍観者たちの群は一斉に頷き相槌を打つ。もちろん、ここで頷けない者には、別の群がちゃんと用意されている。

「そうだな、一匹ぐらいなくなっても何も変わりやしない。ほんとのアリの行列と一緒にだよ。俺が降りてもすぐ後ろには代わりがいる。俺だって前にいる誰かが降りるのを黙って待ってるだけなんだ。どうせ、ここじゃすべて、自由という名目のもとで、みんな死ぬまで競争させられるんだ」

「じつはさ、誰もが競いたがってるのかもな」

「競争の自由、ってやつか」

「棄権するのも御自由に。ただし万民の集う競技場内には立入禁止です。俺たち一般市民にとっちゃ、いつそのこと国家がすべてを管理してる共産圏の方が、まだ諦めがつくってんだ。ま、スターリンみたいな奴がいなければの話だけだよ」

「それにしてもひどいもんだぜ。ろくでもない法案をなし崩しで通しちまう政治家も政治家なら、そいつらを選挙で選び続ける俺たちも俺たちだ。そのあげくが人民民主主義、自由と平等は我らの手に、だとさ」

「とりあえず競技場の内でも外でもいいからさ、自分の好きなことだけやって喰っていければ最高だよな。せいぜい今のうちに、いい手を考えとこうぜ。大学生っていう、最後の執行猶予期間を利用してさ。どうせ他人なんかあてにできないんだし」

もう誰も他人の話など聞いてはいない。それぞれがそれぞれの思惟の中で眠り込み、かみ合わない会話が相も変わらずしらすらと、気まぐれに飛び交い続けるのだ。

「向こうで知り合った連中と、毎日酒飲んでクダ巻いてばかりや」
盆の十四日。明日が聡の二十歳の誕生日だという日の夜、盆休み
でちょうど帰省していた中学時代の級友らが集まり、小さな同窓会
が開かれた。久しぶりに顔を合わせた仲間たちは、皆懐かしげに再
会を喜びあい、それぞれの近況や思い出話などを語り合っていた。
同じく懐かしい昔話に加わろうとする聡だったが、なぜか皆の話の
中に素直に入ってゆけない自分を感じていた。聡の口をついて出て
くるのは、いま東京で送っている大学生活の話ばかりだった。「こ
ないだまでボルシェビキのこと、ロシア人の名前や思いつた俺相手
にやで、よってたかつて訳のわからん、たぶん政治や経済の話や。
東京の人間で、なにつけ詰まらんような顔しとるくせに、まじめ
に政治の話するの好きなんや。不思議な人種やろ」知らん間に聡く
ん、なんやおしゃべりになったねエ。「話合わせてなんかしゃべら
なナ、相手にしてもらえんのや」思いつた次から次へと浮かび上が
ってくるというのに、いざ口に出そうとするたび、それが遙か昔の、
ありえもしない話であるような気がしてならなくなるのだ。「妙に
冷めとるように見えて、どっか不安で怯えとるような、冷め切って
ない連中が多いんや」やがて懐かしいこの土地が、まるで架空の場
所のように感じられ、止まった時間の中でただ自分だけが呼吸し動
き回っているような、そんな気がし始める。すっかり紅が落ち、色
を失った目の前の小さな唇がわずかに震えている。へーえ、一体ど
んな人らなん？ 幻の立ち込める中、聡は動かない皆に向かい、今
だけを語り続ける。「なんかな、どっかおかしいんや。みんな、ち
よつとずつ頭がイカレとるいうか……」聡の脳裏に大学で知り合っ
た友人たちの顔が一瞬浮かび、すぐに消える。いかれとるって、達
也みたいにかん？ 思いつた中の旧友たちは、変わらぬ笑顔で聡を
見つめる。「ま、いかれ方がちよつと違うな。達也みたいなのは、

おらんな」やつぱり！一斉に皆が笑った。

達也は来んのかいの？ そう問いかけながら聡の隣に席を移したのは、同窓生の一人である保生だった。聡と保生、そして達也の間には、まだ他の誰にも言ったことがないある秘密があった。「達也は来んのかいの、か。あん時といっしょやな」そう言っただけで聡は保生に笑いかけた。「ギョロメのヨシヤン死んでから、もう何年になる？」そんな聡の言葉に保生は静かに指折り数え、兄貴が死んだん中二ん時やから、六年前やな、オレ、とつくに兄貴の歳こえてしもたわ、と苦笑いを浮かべながら答えた。

*

お前に一つ頼みある。電話の受話器ごしに、保生がいつになく深刻な口調で聡にそう切り出したのは、中学二年の八月、保生の兄であるヨシヤンがバイク事故で逝ってから三カ月ほど経ったある夏の日のことだった。「頼みつてなんや、言うてみい」オレな、明日、魚淵に潜るんや。「本気か？」お前も来い。「別にかまんけど、なんでや？」なんでもや、ほんで達也も誘て来い。「ははーん。兄貴の弔い合戦か？」なんでもええから絶対あいつを連れて来い、それだけじゃ。そんなやりとりの後、保生は一方的に電話を切った。聡は保生の気持ち痛いほどわかる気がした。クラスの皆が気を使い、保生の前ではヨシヤンはもちろん魚淵の話題すら決して口に出さずとはしないというのに、達也だけは一向気にする様子もなく、まるで保生への当てつけのように、魚淵での釣りの様子を生々しく語るのだ。聡はそんな達也を睨みつける保生の視線の鋭さに早くから気づいていた。

翌朝、達也は約束の時間に三十分ほど遅れて魚淵に現れた。遅刻の言い訳どころか済まないの一言も言おうとしない達也に向かって、聡が文句を言おうとしたその時、保生はいきなり傍らの岩に立て掛けてあった銚子を握り締め、服を着たままの格好で魚淵に飛び込んだ。

暗く淀む魚淵が丸のまま保生を飲み込み、その姿影を跡形もなく消し去つてから、どんなに少なくみても五分は経過していた。まるで何もなかったかのように魚淵はいつもの顔を取り戻し、岩から流れ落ちる水しぶきの音だけがゴウゴウと不気味に響いている。聡にはそれが途方もなく長い時間に思われ気がなかつたが、時々思い出したように腕時計を覗き込み、二分三分と誰にともなく時を告げる達也の姿はあくまで落ち着き払つていた。「ちよつとおかしいぞ。俺見てくるわ」しびれを切らした聡が慌てて服を脱ぎ始めるのを黙つて制した達也は、なにか小さく呟きながら魚淵に飛び込み、あつというまに深みの中へと消えていった。やがて急ぎ浮き上がり水面に顔を出した達也は、全身ぐったりと、それでも堅く銛を握り締めたまま意識を失つている保生を抱きかかえるようにして、やつとのことで聡が待ち構える岩場に泳ぎついた。

達也によれば、保生は魚を深追いしすぎて大きな岩の裏側にはまり込み、多分そこで息が尽きたのだらうとのことだったが、飲み込んだ水をすっかり吐き出させると意外にもあつけなく意識を取り戻した保生は、自分は決して溺れたのではないと言い張りながら、まるで堰を切つたように夢中でしゃべり始めた。穴の奥に兄貴がおつたんじゃ、嬉しそうに笑いもて手招きしよるから、オレは一生懸命そつちへ向いて泳いどつたんや。いや、兄貴は怒つてたんかも知れん、よう思い出したら、むちゃくちゃ恐ろし顔しとつたような気がするわ。帰れ帰れ言うて、一生懸命手エ振つてたんかも知れん。でもな、淵の底泳いどる時、あんな幸せな気持ちになつたんは生まれ初めてや。そう語る保生の表情はこの上もなく嬉しそうだった。センサーよりも気持ちよかつたんか？とからかう聡にいかにも心外だとばかり保生は当たり前じゃと答え、癖になりそうやと言つてまた笑つた。さつき死にかけたことなどすっかり忘れている保生のそんな姿に、聡と達也は半分呆れ半分つられ、三人して笑い転げたのだつた。

*

当時はあんなに鮮烈だった記憶も、今となつては過去の幻だった。聡は今、同窓会で隣に座っている保生が、本当にあの日の楽しげな保生と同じ人物だとは、とても信じられなかった。自分の目の前に確かにいるはずの保生が、まるで二次元の銀幕に映し出された厚みのない無声映画の俳優のように、遠く、危うい存在に見えた。聡にはこの場で起きていることすべてが、すっかり色を失った思い出の中の出来事のように感じられた。

時が過ぎやがて話も尽き、そろそろこの同窓会もお開きにしようかという声が方々で聞こえ始めたころ、バタリと大きな音を立てて店のドアが開いた。いかにも不機嫌そうな目をした達也が姿を現し、黙ったまま椅子に腰掛けた。なにしようたんや、遅すぎるぞ、という声に達也は、「夜釣りしよつたらつい時間忘れてな」と答え、呆れ返っている皆に向かいまた明日も早朝から釣りにゆくつもりだと言う。「皆の顔見ただけで十分や。明日も早いし、もう帰るわ」そう言い捨てささと立ち上がった達也の姿が、聡にはその時、すべてが静止していたはずのこの場所で、なぜかはつきりと動いて見えた。

「もつとゆっくりしてけよ。だいたいお前、盆の間は生き物殺したらあかんのやぞ。また骨おるぞ」と聡はからかったが、「それくらい知つとるわ。別に殺すわけっちゃう。盆が過ぎるまでは生け簀に飼うとくんじゃ。それより聡、お前どうせ足ないんやろ。車で送つたるさか来いよ、もう行くぞ」と達也は、一刻も早くこの場を離れたいとも言つように聡をせかすのだった。

*

「ほんまに、いつ会つてもリアルな奴やな」

達也に言われるままに自動車に乗り込んだ聡は、流れはじめた夜

の景色を眺めながら、誰に言うでもなくそうつぶやいた。

「なんやそれ？」と達也が問う。

「それにひきかえ俺は、いつでもただの傍観者や」と聡は独り言ちる。

「ん？ なんのこつちゃ、それ」

「いや、別に」

「なんやお前、東京かぶれしたんちゃうか」

「ほつといてくれ。それより達也、お前むちゃくちや恐い運転しよんな。もつとゆつくり走れんのか」自動車一台通るのがやっとの、山沿いの細い道路を強引に飛ばす達也の運転は、今まで聡が体験してきた中でも最も乱暴な部類に入るものだった。「谷へ落ちたらいつかの終わりやど。頼むわ、あのせゆきだけは勘弁してくれよ」

「アホ、俺の腕を信用せえや」と言っただ達也は笑う。

「ぜんぜん信用できん。お前には魚淵の祟りもついとるし、だいたい男と心中なんてまっぴらゴメンじゃ」

「こつちこそ遠慮しとくわ。もし俺が死ぬにしろ、絶対独りで死んでみせたる」

「そんなかつこええこと言うて、どうせお前以外の全員死んでも、お前だけはピンピンしとんちゃうか？ ほんま羨ましい奴やで」

達也は聡の言葉を無視するかのようになり、運転席の横にある時計を指差し言った。

「おい聡、十二時過ぎたぞ」

「ん？」

「二十歳やろ」

「ああ、もう十五日か」そう言っただ、聡は黙り込んだ。

毎年、八月十五日がくるたびに、聡はあの十七回目の誕生日の夜を思い出す。遠くから聞こえてくるお囃子の音。階段に並んで座っていた達也の姿。漂う煙草の煙り。その時交わした言葉の一言一言が、あのむせ返る夏の夜の光景と混じり合いながら静かに聡の耳を打ち、取り返しのつかない時がそつと流れ始める。

聡は言う。

「お前に会つたら、聞ごとと思つたことが一つあるんや」
「なんな？」

達也は自動車の速度を少し落とした。

「お前、なんであの時、煙草で自分の手、焼こうとしたんな」
「知らん、いつの話や」

「三年前のお盆の夜や、学校の階段で」

「ああ、あん時か」

「ずっとな、なんや気になつて仕方ないんや。なんでや？」

「さあな、もう忘れた。あの淵の祟りつちゃうか」と達也は笑みを
浮かべて言う。

「ちやかすなよ」

「ほんまじゃ。別に理由なんぞない」そう答える達也の顔からは笑
みが消え、ふつと寂しげな影が差したように見えた。「松明の火イ
に飛び込んで燃えとるアホな虫見とつたら、突然そうしとなつただ
けや」達也は再び自動車の速度を上げ始めた。「ほんまそれだけや」
突然降りだした雨に達也はワイパーのスイッチを入れた。視界は
すっかり闇に包まれ、谷底へと真っすぐに落ちる断崖と道路を分か
つ白線すらもほとんど見えない。物凄い勢いで自動車の屋根を打つ
雨音に負けぬよう達也は大声を張り上げ言う。

「雨粒大きいから、明日の朝までには上がるな」

「でもこの勢いやつたら、かなり増水しそやぞ。釣りは無理やろ」
「かもな……。どや聡、あさつてあたり、いっしょに釣りに行くか
？」

「釣るかア。久しぶりに行こかな」そう言う聡に達也は、

「お盆に釣りしたらあかんのちゃうんか、この寺の息子が」と、さ
つきのお返しとばかり即座に切り返した。

「ええんじゃ。殺さなんたら」と聡は答え、二人は顔を見合わせて
笑った。

達也は再び前に向き直りながらこう問いかけた。

「ところで聡、大学、楽しいか？」

聡はしばらく考え込んだ。

「多分な。最近、やっと慣れてきたわ」

「そうか。慣れてきたか」

そう言ったきり、二人は黙り込んだ。

*

浪人中は一度も実家に帰らなかった聡にとって、大学一年のこの夏休みは、いつも自分と同じ紀州訛りが飛び交っていた高校時代までと違い、言葉はもちろん周りにいる人間の数も全く違う環境で暮らし始めて以来初めての、ほぼ二年ぶりの帰郷だった。ほとんどの男が植林や伐採を生業とする、山に囲まれた過疎の土地に生まれ、新宮から名古屋、そして東京へと次々に移り住み、ここ数年の間に社会の近代化を彼個人の中で急速に体験してきたともいえる聡には、この生まれ故郷はすでに自分とは別の世界だった。猪撃ちのための何十頭という猟犬が放し飼いにされ、山の斜面に作られた猫の額ほどの段々畑では、自家用の畑作や稲作が行われているのも昔のままだったし、どここの淵では大山椒魚が増え過ぎたため恐くて泳ぐこともできないという子供たちの関心の的である話も、以前ならそんなりと受け入れられたはずであった。しかし今の聡には、この懐かしい土地で見るもの聞くものすべてが、新鮮な驚きの対象だった。まだ盆の最中だというのに、庫裏の裏手にある物置小屋から数年ぶりに自分の釣竿を引っ張り出し、溪流釣りの仕掛けを作っている聡を見ても、僧侶である彼の父親は何も言おうとはせず、毎日の日課である朝の鐘つきに向かった。生きとし生けるものの命を奪うことの悲しさから人間の業の深さ、果ては輪廻転生を超え現世での解脱に至るといふ毎度の説教コースを、少なくとも十五分は聞かされるものだと覚悟していた聡は、そんな父の姿になんだか拍子抜けする思いだった。約束の時間、六時きっかりに達也が自動車を迎えに

きた。達也は久しぶりの仕掛け作りに手元のおぼつかない聡をしばらく黙つて見守つていたが、やがて見るに見かねたのか苛立ちを隠そうともせず、「相変わらずとろくさい奴じゃ」と聡の頭をひとつ小突いてから手伝い始めた。釣鐘の音が途絶えたことにも一向気づかず、わき目も振らず作業に没頭していた二人の側に、いつの間歩み寄つたのか聡の父親がすつくと立ち、大声でオイッと呼びかける。突然の声に驚き顔を見合わせる聡と達也に、禅僧は一言、釣りはかまわんが殺生はいかんど、とだけ言い残し、するりと本堂の奥へと消えた。「お前のおやじさん、忍者みたいやな、心臓に悪いで」と言つ達也に「ほんま、びっくりした」と聡は答え、いつになくあつさりした父親の態度を不気味に思うと同時に、覚悟していた説教が一言で終わったことを、そつと心の中で、本堂の奥に座る御仏に珍しくも深く深く感謝した。とその時、

「都合のええ時だけ仏さん信じんなや」と、突然低くしゃがれた声で達也が言つた。思わず「なんでわかつたんな？」と聞き返す聡に達也は涼しい顔で、「お前の顔見たらわかる」と答える。聡はまるで心の中がすっかり見透かされているような気がし、ふと、目の前で薄い笑みを浮かべている達也が自分と同じこの世の住人ではなく何か大きな存在の化身のようにも思え、背筋に寒気が走るのを覚えた。

小さな土地の集落を通り過ぎ、その最後の民家から五キロほど上流に溯つた場所で達也は自動車を止め、トランクから自分の荷物だけをさつさと取り出すと、夏草が生い茂りほとんど隠れて見えない小道になんの躊躇もなく分け入つた。聡はそんな達也の背中ごしに「こんなとこに川へ下りる道あるの、初めて知つたわ」と声をかけしきりに感心しながら急いで後を追つた。達也の住む集落は別の支流にあたり、この川については幼い頃から慣れ親しんできた聡の方が詳しくて当然のはずだった。少し下流のダムに流れ込む二つの支流に沿つて、右にのぼれば達也の住む集落、左にのぼれば聡の住む集落に着く。いってみれば他所者である達也の方がこの支流の地理

に通じている。その事実を生粋の土地つ子である聡は少し恥ずかしく思った。河原に降り立った達也は後ろを振り返るうともせず、「ここで餌をとるぞ」と言いながら荷物を置くのももどかしげに流れへと入っていった。

あと二キロも溯れば魚淵にたどり着く、そんな場所をわざわざ選ぶあたりが達也の達也たる所以などと、最初聡は軽く考えていたのだったが、さすがに釣りの名人と呼ばれるだけあって、たしかに達也が選んだその場所は、釣りの餌を採るには格好の穴場だった。水苔に被われた川底の石を手当たり次第めくってみるたびに、その裏にはヒラタカゲロウの幼虫など溪流釣りの餌となる川虫が、うじやうじやと張り付いてるのだ。三十分もしないうちに二人の餌入れは川虫で一杯になった。

すっかり釣りの準備も整い、「どつちがぎょうさん釣り上げるか、勝負じゃ」と息巻く聡に、達也は不敵な笑みを浮かべながらこう答えた。

「お前から先に行けや」

溪流釣りでは、下流から上流へと釣り上ってゆくのが鉄則といわれている。特に複数で釣りをする場合、先行して釣り上がってゆく者が有利であることは言うまでもない。その日に限ってさっぱり釣果が上がらないと思えば、実は自分の知らない先行者に獲物をあらかじめ釣り尽くされた後だった、なんてことも、警戒心の強い小雨釣りでは珍しいことではない。その流れでの初物を先に釣り上げてゆくことができるということは、本当ならば絶対的に有利な特権だといつてよかった。そのうえ今日は盆の最中であり、二人の他には一人の釣り人も見当たらない。今日こそ小雨釣りで初めて達也に勝つチャンスだと聡は意気込んだ。

勝負の行方は二時間もしない間に見えた。それまで黙々と釣竿を振り回していた聡は、自分の倍以上のペースで小雨を釣り上げていく川下の達也を恨めしそうに眺め、ため息を一つついたあと大声を張り上げた。

「師匠！」

「あん？」驚いた顔で達也が振り向く。

「今日はほんま凄いのう、入れ喰いやないか」

「いっつものことじゃ。お前と一緒にすな」と言つて達也は笑い、釣竿を右手に持ち替え川原に置く。「どや聡、ちよつと早いけど飯にしようか、腹へつた」

「まったく、こんな勝負やつてられんわ。アホらし」と言うが早いか聡は竿を投げ出し、川辺の心地よい風の中、くわえ煙草に使い捨てライターでなんとか火をつけようと悪戦苦闘している達也に向かつて、「とりあえず燃えそうな木イヤ、木イさがそ」と言いながら、さっさと魚を焼くための薪集めにかかった。

逃げ出そうと暴れる小雨を達也は左手に握つたナイフで素早く割り、なにくわぬ顔ではらわたを取り除き清流で血を洗う。次々と達也が放つてわたす微かにまだ息のある小雨に、とどめとばかり聡は手早く塩を擦り込み、木の枝を細く削つた串に刺しては燃え盛る炎の側に一本ずつ立ててゆく。「見てみ、聡。きれいやと思わんか？」

そう言つて達也は、いま切り割いたばかりで血にまみれた小雨の腹を聡の目の前に差し出した。「お月さんみたいやろ」そこには深紅あざやかな血の中にぽっかりと浮かぶ白い浮袋があつた。「いくらなんでも月には見えんぞ。気色悪いだけじゃ」と聡は正直に答え、

「お月さんみたいやて、お前にもそんな風流な趣味あつたんか」と言いながら達也の顔をまじまじと覗き込んだ。そんな聡の所作に達也は突然そっぽを向き、再び黙つて元の作業に戻つた。仕方なく聡は、「今日のこのペースやつたら、ちようど二時ごろ魚淵やな。そこからへんで折り返して釣り下ってくるか」と話題をかえたが、達也からの返事はなく、ちらつと聡の方を見やつただけの達也は引き続きナイフを動かし続けた。魚淵という言葉をした時、聡のなかを何か不吉な予感が走つた。しかし、そんなものはただの気のせいだと自分に言い聞かせながら、聡は燃え盛る炎に新しい薪を放り込んだ。やがて小雨の塩焼きの美味そうな匂いが辺りに漂い始めるに

つれ、聡の口の中では今にも涎が垂れそうなくらい次から次へと唾がわき出し始めた。「もうあかん、我慢できん」と言う聡の言葉を合図に、二人は小雨の塩焼きにかぶりついた。ただ塩をまぶしただけの素人料理といっても、ほんの数分前まで清流を元気に泳ぎ回っていた、その新鮮としか言いようのない小雨だけあって、味の方はまことに格別だった。

「あん時みたいに喰い過ぎんなよ、聡」

「え？ あん時？」

そう聞き返した後、聡は中学時代のある夜のことを思い出し、思わず吹き出して笑いながら言い返した。

「お前こそ喰い過ぎんなよ！」

聡にとつて、達也と同じ教室で学んだ中学三年間のなかでも、もっとも印象深い思い出が詰まっているのが、二人して家出騒動をやらかした中三の春から、秋の運動会にかけての期間だった。二人は学校では同じ体育委員に立候補し、学外ではしばしば連れ立って釣りに出掛けた。普段は一人で釣りに出掛けることが多い達也だったが、なぜかその時期に限って聡を釣りに誘い続けた。

それは中学三年の、ちょうど梅雨の最中の出来事だった。珍しく天気の良い日が五日ほど続いた後の日曜日。その日も達也と聡は、早朝から揃って釣りに出掛けた。時の経つのも忘れ、夢中で釣竿を振り回しているうちに、二人はかなり山の奥まで入り込んでいた。いつの間にか陽は傾き、辺りは今にも暗闇に包み込まれようとしていた。「ちよつとヤバイんちゃうか」と言う聡を強烈な空腹感が襲う。二人は昼食をとるのも忘れ釣りに没頭していたのだ。そして追い打ちをかけるような突然の雨。二人は少し前に通り過ぎた山小屋に駆け込んだ。山小屋といつてもそれは、たぶん元は炭焼きの小屋だったのだろうが、いまとなつてはすっかり朽ち果て、大きな台風でもくればひとたまりもなく吹き飛ばされそうな、廃屋同然の掘っ建て小屋だった。

「今から帰つても九時は過ぎるぞ、どうする？」と聡。

「雨も止みそうにないしな。しゃあないな、一晚ここに泊まっていくな」と達也。

「そやな。でも明日は早起きせな、学校の朝礼に間に合わんぞ」とにかく腹へった。飯の用意じゃ

さつそく達也はその日釣った小雨をさばき始め、聡は聡で薪集めに取り掛かった。思ったよりも雨漏りがひどくなかったことに感謝しつつ、それでもどしゃぶりの雨の中、比較的乾いた木の枝を拾い集め、あげくは小屋の壁板を剥ぎ取ってまでして薪を作り、小屋の

中央にある、もう何年も使っていない様子の囲炉裏に積み上げたまではよかったが、そこにきて聡はある事実に思い当たった。「おい達也。肝心の火イないぞ」そう言つて空腹のあまり囲炉裏端にへたり込んだ聡を横目に見ながら、達也はポケットからおもむろに煙草と使い捨てライターを取り出した。「ま、一服しようれよ」「おお、素晴らし！ 神さま仏さま、達也さまや！」嬉しさのあまり聡は叫び声をあげた。

哀れ串刺しにされた小雨の、とりあえず最初の六匹が焼き上がるのを待つ間、聡と達也は囲炉裏を挟んで向かい合い、目の前の御馳走をじつと見つめながら二人して煙草をふかした。達也はまだおかしさが去らないのか聡の顔を見ては笑いを噛み殺すようにクゝゝと肩を震わせている。ほんの数分前、一足先に囲炉裏端に座り寛いでいた達也は、すべての準備を終えやつと腰を下ろした聡に向かつて「ご苦労さん」と声をかけ、気を利かせたつもりか一本の煙草とライターを差し出した。聡は差し出されたものを黙って受け取ると、なにを思ったのか煙草をくわえようとせず、ただ手に持ったままでライターの火に押し付けたのだ。そんな聡の行為に達也は最初あつけにとられ、次に腹を抱えて笑いだした。「お前、アホか！ 口にくわえて吸わな火イつかんぞ」とあえぎあえぎ言いながら達也は床の上を転げ回り、涙を滲ませ笑いこける。「ワレこら、笑い過ぎじゃ」と初めムツとしていた聡も、笑いが止まらずゲホゲホと咳き込んでいる達也につられたのか、すぐ一緒になつて笑い始めた。

「煙草、初めてやつたんか？」

半分ほど焼け焦げた聡の煙草を見て、やつと落ち着いたらしい達也がそう聞いた。聡はそれには答えず「不味のう。ようこんな不味いもん吸つてられるな」とつぶやく。酒も煙草もやらない禅僧を父に持つ中学生の聡は、煙草の味はもちろん火のつけ方すら知らなかつたのだ。煙を吸い込んでむせ込む聡に、「無理して吸わんでもええぞ」と今度は一変心配そうに達也は言つたが、意地になつている聡は二本目の煙草を要求した。

そうこうするうち、塩をまぶした小雨の焼けるちりちりという音が聞こえ始め、なんとも食欲をそそるいい匂いが二人を包み込んでいった。「そろそろ、ええんちゃうか」と言いながら手を伸ばす聡を「もうちょい待てや」と達也はひとまず制し、聡が渋々手を引っ込めるのを見計らって「おりゃあ」と一声叫ぶと、色良く焼き上がった六串の小雨すべてを丸ごと掴み取り、頭から一気に喰らいついた。一体何が起こったのかと身動きもできず固まっていた聡がやつと我に返り、「嘘やろ、こいつ」とつぶやいた頃には、御馳走はすでに跡形もなく、達也の胃袋の中にすっぽりと収まっていたのだ。後はまるで戦争だった。新しい小雨を串に刺しては次々と火にかけ、焼き上がるはたから我先にとかぶりつく。そのときの二人には、言葉を交わす余裕すらもなかった。軽く四、五十匹はあった小雨をあつという間に喰い尽くした二人は、膨れ上がった腹を抱え、朽ち果てた床板の上に同時に倒れ寝転がった。

「もうあかん。気持ち悪い」さも苦しげな表情で呻く聡に、「ほんま吐きそうや」と達也も答える。同じ魚ばかりを、それも昼食用に持ってきた白米以外にはつまみもなにも無しでひたすら食べ続けたのだから、気分が悪くなるのも当然だった。「最初はむちゃくちゃ美味かったのにな」と言いながら達也は煙草を取り出し、「この食後の一服がたまらんのよ。お前も吸うか？」と言って聡にも差し出す。「いま煙草吸うたら絶対吐いてしまうわ」と聡は断り、寝転がったまま天井に向かって煙を吐き出している達也に向かって、「実は俺、もう十匹目ぐらいからええんちゃうぞ、お前がやめんかには負けられん思て」と切り出した。「俺もじゃ。お前がやめんから無理して喰うてたんや」そんな達也の返事を聞き、達也も自分と同じだったことを知って思わず笑みをもらしながら、今夜はやけに笑いの出る夜だと、聡はふと思った。

「こんな夜もおもろいな」と聡はつぶやきながら、ほんの数週間前の修学旅行の夜を思い出していた。ひと部屋に十人以上押し込められ、初めて見る過激な東京ローカルの深夜番組に皆が皆興奮し、ま

るで眠ることなど、誰一人として考えもしなかった夜。しかし、その夜も達也だけは眠っていたのだと思い、三十人ほどのクラスの中でたった一人修学旅行に参加しなかった達也がその夜、ここではないどこかの廃屋の囲炉裏端でぐっすりと眠りこけているところを聡は想像した。そして、旅行から帰った直後、クラスで唯一東京に行ったことがない達也を、級友たちと共に付け焼きの関東弁でからかっていた自分が、今夜は達也と二人して闇に迷い、同じ囲炉裏の炎を挟んで寝転がっているのを、なぜかとても不思議なことにように感じた。

雨は一向にやむ気配がなかった。しばらくのあいだ二人は、降りしきる雨音にじっと聞き入っていた。やがて、「そういや俺、二回目や、山で迷たの」と思い出したように聡が言い出した。今日は別に道に迷たわけ違うでエと口を挟んだ達也を無視するように、「そんな時もよう食べた。でも小雨と違うけどな」と聡は続ける。迷たん違って、と念を押す達也を再び無視して、聡は一人もの思いにふけるように、「たしか小学五年の時や、山の斜面一面のキイチゴ見つけてな」

自分の言葉を無視されたことに怒ったのか、達也は少し声を荒げてこう言い張った。

「ウソつけエ！ 山一面で、キイチゴがそんなにぎょうさん固まって生つとるわけないやろ」

「ほんまじゃ、確かに生つとった。絶対にほんまじゃ」と聡も引かずに喰い下がる。

「ほんなら明日行ってみよやないか。どの山のどの辺に生つとったんじゃ？ ほれ、言うてみい」

「それがわかったら世話ないわ！ わからんから迷子になったんじや。黙って俺の話の聞いてけ！」

それから聡の長い長い思ひ出話が始まり、達也は達也で珍しく饒舌な今夜の聡を少し意外に思ひながらも適当に合いの手を入れていたが、いつしか二人ともども眠りにつき、やがてパチパチと音を立

て燃えていた囲炉裏の火も消え夜半も過ぎ、後にはただ降りしきる雨の音だけがいつまでも響いていた。

*

明くる朝、生暖かく湿り気をたつぷり含んだ梅雨の風に当てられ聡は目を覚ました。寝ぼけ眼のまま朽ちた屋根の隅にぼっかりと空いた大きな風穴ごしに、どす黒く曇った空をぼんやりと眺めていた聡は、やっと昨日の夜のことを思い出した。達也と共に釣りに出掛け、山の奥深くで雨と闇に取り囲まれた聡らは、家に帰るのを諦め、山小屋での一泊を選んだのだ。起き上がるのも面倒くさく、かといつてもう一度眠りにつくのも億劫なまま、そのどす黒い空から際限なく落ちてくる鬱陶しい六月の雨を、聡は惚^{ぼう}けたように見つめていた。やがて偶然の天窓から降り注ぐその紫の雨が一瞬のうちに黄金色に変わり、屋根に空いた無数の隙間から射し込む眩しい輝きが、聡の寝転ぶ小さな廃屋一杯に拡がっていった。

「狐の嫁入りやな」

向かいで眠っているものだとばかり思っていた達也はその時半分身を起こし、聡と同じく一つ一際大きく空いた屋根の穴をじつと見上げていた。驚いた聡の「起きとったんか？」と言う問いには答えず、ただ「きれいやな」とだけ言って空を見つめる達也は光に包まれ、まるでさっきの瞬間、天から降り注いできた眩しい光とともに生まれ出た幼子のようにも思え、聡はふと、自分も達也の目には同じように映るのだろうか、と考えた。少しの躊躇の後、聡はできるだけさりげなくこう話しかけた。

「修学旅行んときな、東京を案内してくれたガイドさんに、狐の嫁入りや言うても通じんのやで」

「向こうはなんて言うんな？」空を見上げたまま達也が問う。

「天気雨」

「なんや味もそっけもない言い方やな」達也はさも興ざめしたよう

に空から目を逸らせ、おもむろに立ち上がり入り口に歩み寄ると、ギシギシと軋む重たい板戸を無理やりこじ開け外に出た。やがて頭から水を滴らせ戻ってきた達也は、「お前も川で顔洗てこいよ。冷こつて気持ちええぞ」と言いながらにやりと笑い、「釣りには最高の天気や、今日は学校休もか?」と聡を誘う。その言葉に今日が月曜日だったことを聡は思い出したが、迷わずこつ答えた。

「賛成! でも反対じゃ!」

「え?」

「学校休むのは大賛成やけど、釣りはもうええわ。小雨は喰いあきた」

「よつしゃ。俺にまかすとけ」と達也は答え、なぜか釣りの道具の入ったリュックサックを肩に背負うと、聡にこつちへ来いとばかり手招きしながら小屋を出ていった。それを見て聡も急いで立ち上がり、何をするにしろ唐突な奴だなどと達也のことを思いながら「ちよつと待つてくれ」と声をかけ、小屋のすぐ下を流れる川で顔を洗い喉を潤すと、その間にも山の中へとどんどん踏み入ってゆく達也の後ろ姿を追って駆け出した。

雨が止んだばかりでまだぬかるんでいる山の斜面を登りながら、達也は様々な形の木の枝を次々と拾い集めていった。五分ほど歩いた場所で達也は立ち止まり、一言「ここにしようか」とつぶやくと、手に持っていた木の枝をばさりと投げ出し、その内の何本かを地面に突き刺しはじめた。「なんか手伝おうか」と言う聡の申し出も「まあ黙つて見とけ」とあつさり断られ、達也がいったい何を始めたのか見当もつかない聡は、独り作業を進める達也をただなすすべもなく見守っているしかなかった。リュックサックの中から釣り糸に使うナイロン・テグスだけを取り出し、そのテグスを地面に突き刺した一際長い木の枝の先にくくりつけ、何度も枝のしなりを確かめている達也の様子から、どうやら何かの罠らしいということだけは聡にもわかった。

仕掛けはほぼ二十分ほどで完成したようだった。作業の手を止め

ふうと大きく息をついた達也に向かって、聡はまるでお伺いを立てるようにそつと声をかけた。

「なんや、それ？」

「クグツや」と達也はあつさり答える。

「クグツ？」

「おうよ。これで鳥とるんじや。こんなかに餌を入れといてな、周りは枝で囲んだアるさか入り口はこしかないやろ。当然餌につられてなかに入ろうとする鳥は、まずこの枝にとまる。ま、この枝がバネの止め金みたいなもんや。いくぞ聡、よう見とけよ」そう言つて達也は、鳥に見立てた細長い小石をその止め金と呼ぶ枝の上に放り投げた。その瞬間バチツという大きな音がし、上から落ちてきた別の枝が小石をがっちり捕らえた。「これで即死や」と言つ達也に、まだ驚きの表情を隠せないままの聡は、「まるでギロチンやな」と答えた。

本物のギロチンでは金属の刃の重量で加速度をつけ獲物を切り落とすのだが、達也が作った仕掛は、重力の代わりに木の枝のしなりを利用したものだ。地面に突き刺した一番長い枝を思い切りしならせ、その枝が元へ戻ろうとする力を、テグスを通じてギロチンの刃に当たる短い枝に伝え、ちょうど獲物が真下にきた時、その枝が落ちるよう細工してあるのだ。

「まっこと凄い仕掛けやな。お前が考えたんか？」と心から感心しつて言つ聡に、「むちや言うな。こんなん考える頭あつたら、大学目指してバリバリ勉強しとるわ」と達也は答え、このクグツとは大昔から伝わる鳥を捕るための伝統的な仕掛けであり、この土地で暮らしていながら、今の今まで知らなかった聡の方がおかしいのだと言ふ。そして本来は冬場に使う罠なのだが、とにかくすべて自分に任せおけば大丈夫だと達也は言い切つた。さつそく聡はそのクグツとやらの作り方を詳しく教えてもらい、二人で他の場所にも五つほど同じ仕掛けを作つたあと、グミやクワなどの木の実、あげくは蛙や昆虫の死骸まで、手当たり次第に餌として放り込んだ。初めての

経験がよほど嬉しかったのかすっかり調子にのり、「せつかくやから小雨も餌にしておまお」と言い出した聡に、「餌はもう十分……でもないか」と言いながら達也はにんまりとほくそ笑んだ。聡はその表情から、今日も釣りができるのならまずは御の字だと、達也がそつと心の中で呟いているのがわかった。

その日の夕方、クグツには百舌ひゃくせつと鶇しよとうじが一羽ずつかかっていた。もう魚はいやだと言っていた聡だったが、結局晩飯は小雨の塩焼きと野鳥の丸焼きということになった。とうとうその日一日を通して、お互いの口から家に帰ろうという言葉が発せられることはなかった。二人の間では、山小屋への連泊は暗黙のうちに了解されていたのだ。聡は再び小屋の壁板を剥がし、達也はナイフを使って小雨と二羽の鳥をさばいた。慣れた手つきで百舌の血を抜き羽根をむしり取る達也には、もう一人前の山男のような風格さえ漂っていた。焼き上がった百舌を一口ほお張り、「お前のさばいた鳥、確かに美味いけど、なんか塩味のもんばかりやな、飽きてきたわ」と言う聡の文句に一瞬力チンときた達也も、「そやな、味噌とか醤油とか、色々持ってきていたらよかったな」とこの場は一応同意する。聡は無性に炊き立ての白米が食べたくなったが、ぐつとこらえながら達也にこう話しかけた。

「達也、お前知つとるか。百舌つてな、蛙とか虫とか、餌になる生き物を木の枝に刺しとくんやぞ」

「なんでエ？」 げんそうに聞き返す達也に、

「冬場で喰いもん全部なくなった時に備えとくんや。今のうちに蛙を枝に刺しといて、冬になってから食べるつちゅうわけや。なかなか頭のええ鳥やろ」と聡は答え、「その百舌も俺ら人間様にかかったらこのザマや」と言っただ裸にされ炎に焼かれている百舌の骸を目で示した。「ふーん」と言っただ也はしばらく黙り、やがてぽつりところ呟いた。

「犬死にやな、蛙」

昨夜と打って変わって穏やかな食事を終え、後は眠るだけとばか

り寝転がった二人だったが、まず達也が最初の口火を切った。「お前が壁の板を剥がしまくったから、寒うてしやあないぞ」少し非難のこもった口調で達也はそう言い出し、「こんなボロ小屋、元々隙間だらけやないか」とうわずった声で言い返す聡との間に一瞬緊張が走った。次の瞬間、聡の耳に飛び込んだできたのは、「ま、そりやそりや」という達也の同意の言葉だった。珍しくもあっけなく達也が折れたことに聡は驚き同時に安堵し、ここでうまく話題を変えなければ気の短い達也のこと、本当に血の雨が降る、その上あいつのナイフは良く切れる、などと物騒なことを考えながら、聡は心の中で慎重に言葉を選びにかかった。「あーあ。帰ったらまた学校へ行かなあかんのか」聡はなるたけ何げなくそう切り出し、「喰い物は別として、ずうつとこのまんま、ぼつと暮らしてたいな」と言葉を継ぎ、「ほんならもうちよつとここにおるか」と自分の言葉にうまく乗ってきた達也に向かって「うん、そうしよ、それがええ」とすぐさま応じた。

その後二人は適当に冗談を交えながら、明日はそつと家に帰り、置き手紙と交換で、米や味噌などをとつてこよう、小雨はもう飽きたから今度は鰻を捕ろう、などと、今後の自給自足計画について夜遅くまで語り合ったのだった。が、結局その計画は実現しなかった。家を出て三日目、火曜日の朝、ぐっすりと眠っていた聡と達也は、それぞれ二人をよく知る土地の若い衆五人に叩き起こされた。それは山中で迷ったのであろう二人を探すため、特別に組織された探索隊の面々だった。彼らの話によれば、昨日の夜になつても二人が帰つてこなかったことから、土地のほとんどの者は、すでに二人は増水した川に流され溺れ死んだものだと考え、さっそく今朝から二十人ほどの人夫を使いダムの底をさらい始めている。自分たちは聡の両親のたつての頼みで、来たくもないこんな山奥まで、わざわざ二人を探しに来てやったのだと言う。なかには山で二人は神隠しにあったのだ、山の神にさらわれてしまったのだというような、なんとも大袈裟な噂を吹聴している者まで現れているらしかった。

聡の実家でもある寺の境内では、聡の両親はもちろん息子発見の連絡を受けた達也の両親、そのうえ二人の通う中学校の担任教師までもが顔を揃え、二人の悪ガキどもの帰りを手ぐすね引いて待ち構えていた。山小屋から帰る途中、二人から事の子細を根掘り葉掘り聞き出した若い衆の一人が、むちやな坊らじゃ、おもしろかつたから帰らなんだんやと、と呆れ顔で言いながら、二人をそれぞれの両親に引き渡した。聡の父親は「とにかく無事で良かった」と安堵したように言い、その後なにか説教を始めたようだったが、聡にはとてもその話の内容を聞いている余裕などなかった。聡の隣では、達也がぼこぼこに殴られていたのだ。息子を引き渡されるなり達也の父親は、一言もしゃべらぬうちにいきなり達也を殴り倒し、それから必死で止めに入る母親の手を払いのけながら、ひたすら自分の息子を殴り続けた。そんな父親に向かい、決して歯向かうわけでも逃げるわけでもなく、ただ痛みをこらえ黙って殴られ続ける達也の姿を、少し羨望の混じった眼差しで聡は見つめていた。

*

中学校の玄関には、この地方に棲む月ノ輪熊や大山椒魚の剥製に混じって、なぜか鰐の剥製が飾られており、生徒たちの物笑いの種になっていた。その姿は明らかに場違いだった。この土地で鰐を見かけたことのある者など一人もいなかったのだ。二日間の無断欠席について職員室でたづぷりしぼられ、その罰に学校中の大掃除を言い渡された聡と達也は、剥製の飾ってあるガラスケースを雑巾できれいに磨きあげながら、ぶつぶつと不平を言い合った。

「このワニ見るたびに、この土地がつくづくいやになるな」

達也はガラスケースをコツコツと叩きながら、さもやる気がなさそうにそう言った。

「なんで？」と聡が問う。

「なんで大山椒魚の隣にワニがおるんな。どう考えてもおかしいや

ん。無頓着つちゆうか無神経つちゆうか。わかるやる?」

「なんとなくな。でも俺、そんなとこけっこう好きやで」

「ウソつけエ。お前もこないだ、この土地から早よ出たいって言う
とつたやないか」

「それとこれとは話は別じゃ」

そう言つて聡はどす黒く濁つたバケツの水に雑巾を放り込むと、
すっかり手の止まつている達也に向かい「なんで就職することにし
たんな」と問いかけた。達也は答えることすら面倒くさそうに、「
勉強するの嫌いなもんが、高校いつてもしゃあないやる」と言い、
「そんな俺も嫌いや」と言い返す聡を左手で軽くいなしながら、
後は呟くように「俺な、勉強も嫌いやし、他人ひとに養ひわれるのも嫌い
なんや」と続けた。

「他人ひとつて、お前のほんまもんの親やる」

「いくら親でも、結局他人たにんは他人たにんや」と達也は独り言のように言い、
こんなことを言ったのは初めてだと少し照れながら「早よ自分で金
稼いで生活したいんや」と言い足した。

「お前えらいな、俺には真似できんわ」そう言つて聡は首を振る。

「ほんじゃお前の方はどうなんや?」と達也は逆に問い返した。

「どう?」

「そやから、なんでここから出たいんな? わざわざ遠くの高校行
くんやろ。この土地のどこが嫌なんや?」さらに達也はまくし立て
る。「ええからひと思いに言つてみ、聡」

「とにかくな、俺はあの家から出たいんや。そんだけじゃ」と聡は、
濁水の滴る雑巾をギュツと絞りながら突き放すように言った。

自らには厳格だが、息子に対しては妙に物分かりの良い父親と、
ただそこにいるだけで誰をも微笑ませてしまう愉快的な母親との間で、
聡は何不自由なく育てられた。両親は聡をとても良く出来た息子だ
と信じていたし、聡もその信頼を裏切らない範囲で気ままに過ごし
てきた。何か悪さをするたびに父親にどつかれるという達也とは大
違いだったが、そんな見せかけの自由さが、聡にはどうも居心地が

悪く感じられたのだ。しかし、実はその居心地の悪さとは、結局念願の一人暮らしを始めてからも大して変わりはず、どこに住もうと何をしようと、たとえどんなに楽しみなことが待っていていようと、まるで空気のように、決して聡から離れることなくついて回る、そんな類いのものだった。まだそのことなど知る由もない聡は、「とにかく早よ家を出たい」と呟くように繰り返した。

達也は聡の答えにどうしても納得がゆかないという顔で、聡の目をじっと覗き込みながらさらに問い詰めた。

「なんで家から出たいんな？ お前とこ結構ええ家やんか。便所は水洗やし蛇口ひねったら湯ウ出るし」

「アホか。そう言う意味っちゃうわ。俺の言いたいのはな、環境っちゅうかなんっちゅうか……」

「便所も蛇口も環境の内やろ。ちやうんか？」と達也は煮え切らない聡を煽るように言い、聡は聡で今日に限ってやけにしつこい達也に少し苛立ち、思わず声を荒げてこう言った。

「あーじゃこーじゃうるさいんじゃワレ！ とにかく家ん中の、雰囲気みたいなのが嫌なんじゃ！」

「俺、なんか悪いこと言うたか？」と聡の氣勢に少し押されたように達也は答え、「でも聡んとこ、それほどむちゃくちゃな家庭とちやうやろ」と静かに続けた。そんな達也の言葉にひとまず「まあな」と答えた時、聡の脳裏に、昨日の神隠し騒ぎの後で、息子を思い切り殴りつけている達也の父親の姿が思い浮かんだ。

「そーいやア、昨日のお前のおやじさん、むちゃくちゃ恐かったな」「そーやろ、むちゃくちゃな奴やろ」

「でもちよっと、お前が羨ましかった」

「な、なんで？」と達也はさも驚いたように問い返し、「俺は説教されとるだけのお前の方が、百倍羨ましかったぞ」と語気強く言った。

「でもな、たまには本気で殴られるくらい、思っきり怒られてみたいんや。なにやってもいっつも説教だけで、そういうところが」そこ

まで言つて聡はガラスを拭く手を止め、ほんなら俺が殴つたるかと、おどけて左の拳を振り上げた達也の方を見ようとせせず、「結局は俺自身の問題なんやるけど」と呟くように言った。

「ほれみい」と達也は勝ち誇つたように言い、「結局お前自身の問題なんやる。ほんじゃあ家は関係ないやん」と駄目を押す。

「話にならん。もうほつといてくれ」と言つて聡は一方的に黙り込んだ。

達也は自分を無視するかのように横を向き、再びガラスを拭き始めた聡に少しむかつ腹を立てたようだった。それからしばらくの間、二人は黙つてガラスを拭き続けた。やがていつまで経つてもしゃべろうとしない聡にたまりかねたように、達也は自分からこう話しかけた。

「ところでお前、ちゃんと勉強しよんか？」

「ぜんぜん」

「あと半年ちよつとで受験やる」

「おう」

「高校、ちゃんと受からな家も出れんぞ」

「わかつとる。そろそろ始める」

「つてことで、たまには息抜きに、またまた今週も釣りに行くか？」
達也は聡の顔を覗き込みながらそう言い、釣竿を振り回す真似をする。

「うーん」と聡は少し考え込み、「ま、ええか。たまには息抜きも必要や」

達也はほつとしたように笑みを浮かべてこう言った。

「今度こそワニ釣るぞ！」

「絶対無理じゃ」と言つて聡も笑った。

*

聡と達也の間に何か目には見えない距離ができ、徐々にではある

が広まり始めたのは、ちょうど秋の運動会が終わり、達也の就職先が決まった頃からだ。その運動会は、聡の中学時代で一番最後の楽しい思い出だった。

中学生最後の年、達也と聡は揃って体育委員に立候補した。二人して黙々と授業の準備や片付けをし、無い知恵を絞って運動会の計画を練っているその姿は、級友からまるで双子のようだと言われるほど息が合っていた。二人にとって三度目の運動会、特に進学をしないことに決めた達也にとっては、恐らく学生最後のものになるであろうこの運動会を、聡はぜひとも素晴らしいものにしたかった。それぞれ暇を見つけては顔を突き合わせ意見を交わし合い、持てる悪知恵のすべてを働かせ考え抜いた結果、二人はある一つの結論に行き着いた。それは運動会最後の見せ場であるチーム対抗全校リレーで自分たちがトップをとり、逆転サヨナラ総合優勝するというものだ。勉強嫌いがたたってか二人とも学業の方はさっぱりだったが、ただ足の速さにかけてはお互いかなりの自信を持っていたのだ。運動会自体については、全校生徒約八十名を四つのチームに分け、様々な競技でそれぞれ得点を競い合うという例年どおりの形式でゆくことに決定した。

一応チーム分けのため生徒全員にくじを引かせ、今から抽選作業に入るからと言い残し、二人きりで図書室にこもった聡と達也は、とりあえず集めたくじをゴミ箱に放り込んだ。聡たちは体育委員であることをいいことに、チーム編成を最初から勝手に決めていたのだ。もちろん二人は同じチームだ。周囲の非難を予想し、表向き足の遅い連中を集めはしたが、それでも校内で一、二を争うほどに頭抜けて走るのが速い達也と聡がいつしよとなれば、十分カバーできる範囲内での人選だった。二人にはその計画は完璧なものに思われた。図書室に入って三分もしないうちに二人は抽選結果を発表した。お前らが組むのは卑怯やないか！ こんなヤラセじゃ、絶対認めんぞ！ と真つ先に保生らが非難の声を上げたが、達也と聡は周りの連中をなだめすかし、なんとか説得に成功した。聡のこの一言が

効いたようだった。

「アホ言うな、これでちょうどトントンぐらいじゃ。他のメンツ見てみい。こいつらなんか明らかに運動神経キレとるやないか」

実際チームの中には人間離れしているほどに足の遅い者も三名ほどいたが、それでも二人の組むチームの速さはダントツだった。予行練習のたびに、聡らのチームは他の三チームを大きく引き離してトップをかつさらいつけた。「山椒魚をチームに入れても優勝できるぞ」と言い合うその二人の速さは、本番までに、周りのヤジと教師の指示によって五人ものチームメンバー入れ替えが行われたほどに圧倒的なものだった。が、その入れ替えが予定外の結果を引き起こした。

運動会当日。日毎に深みを増してゆく山々の緑が一層近く感じられるほどに見事に晴れ渡った晴天のもと、プログラムは順調に進んでいった。肌心地良かった初秋の透明な風が少し肌寒く感じられ始めた頃、大詰めของทีม対抗全校リレー開始のアナウンスが流れた。その時点で聡らのチームは二位。それも最も得点の高い全校リレーを残しての予想外の好位置に、二人は完全に舞い上がっていた。「おい、見たか。二位やぞ、二位」という聡の言葉に、「あの棒倒しがキいたな」と達也は、まるで何事もなかったかのように独りほくそ笑む。「お前が殺しかけたあいつも、最後のリレーには絶対出るて言い張つとるらしいぞ。ほんま大事に至らなくてよかったわ」そう言いながら聡は、先ほどの棒倒しで暴れ回っていた達也の姿を思い出し、両腕にぞつと鳥肌が立つのを感じた。

棒倒しとは二組ごとに分かれた男子で勝負を争う競技であり、全長三メートルほどの檜木の丸太棒を二本立て、先に敵側の棒を倒した方が勝ちというごく単純なゲームであると同時に、審判にさえ見つからなければ殴るも蹴るも自由という、なんとも乱暴な喧嘩続発の場でもあった。もちろん達也が、ここぞとばかり張り切っていたのは言うまでもない。トーナメントの末の優勝決定戦。むりやり達也のマークにつかされた三人の下級生たちは、あつというまに地

面に這いつくばり呻き声を上げ、そのうちの一人は吐き出した血に前歯が二本まじっているのを見て思わず悲鳴を上げた。倒すべき相手方の棒のことなど全く眼中にない達也は、片時も休むことなく、すでに別の者の上に馬乗りになっており、なんとか逃れようと必死でもがくその男の顔面を思い切り殴りつけている。やがて男は動きを止め、ぐったりと力なく横たわり、ただ殴られるにまかせ始めた。グラウンドを包みこむ大歓声の中でも、達也がその左の拳を振り下ろすたびに、男の顔が不吉な鈍い音を立てて崩れてゆくのがわかる。まるでなにかに憑かれ、気でも狂ったかのように、達也は力いっぱい何度も何度も拳を振り下ろす。敵に両足を引つ張られながらも倒すべき丸太を掴んで離さない聡の目に、ふいにそんな達也の姿が映った。その時、聡は泣いている達也を見た。達也の目から溢れ出ている涙が、まるで切り開かれた臓腑の底から際限なく吹き出してく血のように見えた。達也は殴り続ける。組み敷かれ今にも白目をむきかけている男になにか特別な感情があるわけではなく、なにか別の不満をそいつにぶつけているのでもない。達也の目は何も見てはいなかった。ただ殴り、泣いているのだ。聡はそんな達也をこれまで見たことがなかった。そんな達也が、聡にはわからなかった。ほとんど倒れかけていた敵方の丸太から手を放すと、それでもまだ足許にまとわりついてくる敵の一人を蹴り飛ばし、聡は夢中で駆け出した。達也までの、ほんの二、三十メートルという距離が、とてつもなく遠く感じられた。やっとの思いで聡が達也に飛びついた程度その時、競技中断の笛が突然鳴らされた。

「お前むちやくちやしよつたからな」そう言つて聡は目の前に座る達也を見、さっきの棒倒しで異例の退場処分を受けたほどに激しかった達也の振る舞いを思い返しながら、たとえあの時組み敷かれたのが自分であっても、達也は同じように殴り続けたに違いないと考え、こいつと同じチームでほんま助かったと、密かに心の内でつぶやいた。そんな聡の気持ちを知ってか知らずか、「とにかくこれで優勝いただきや」と達也は上機嫌で言い、本当に嬉しそうな笑みを

浮かべた。その笑顔の中にある、いつにも増して穏やかな達也の目を見てみると、さっきの棒倒しが現実にあつた出来事なのかどうか、聡には疑わしく思えてくるのだった。確かに一人は歯を折られ、一人は保健室に運び込まれた。しかしこの場でそれを深刻に考える者は皆無に等しかったのだ。いくら殴り合いの喧嘩など茶飯事だといつても、父兄はもちろん運動会を見物に来ていた地元の警官までもが、あの坊もよりによって捕まったのが達也じゃ、ほんまに運の悪い奴じゃて、と苦笑いだけで済ませてしまふ、そんな土地柄が、聡にとつてこの時ほど居心地良く感じられたことはなかつた。すでに誰も関心は、最終種目の全校リレーに向けられていたのだ。

昨日までのことを考えれば、達也と聡の率いるのチームの優勝は、まず間違いないものと思われた。

「表彰台にはどつちが行く？」

優勝を信じて疑わない聡の問いに達也は、「もちろん、体育委員でもある俺様に決まつとる」と答え、「アホ、俺も体育委員じゃ！」と返す聡に小突かれる。ワレ何するんじやと口では怒りながらも、相変わらず達也の顔には満面の笑みが浮かんでいた。どちらがりレーのアンカーをとるかでも一悶着あり、結局聡が優勝のテープを切り、達也が表彰台にのぼるということで話はまとまつたのだが、しかし、速さはもちろん足の遅さでも最強のメンバーが揃っていたうえ、一人の転倒者まで出した聡たちのチームに勝ち目はなかつた。やつとのことで聡にバトンが渡された時には、前走者は遙か彼方を猛然と力走していたのだ。聡は生まれて初めて、この世界にはどんなに頑張つてみても、決して取り返しのつかないことが、確かに存在するのだということを感じ知った。

リレーの結果は最下位だった。

案の定、達也の怒りは爆発した。

「ワレの足は山椒魚の“剥製”以下じゃ！ちつとも前に進んでなかつたやないか、ふざけとんのかボケが！」恐怖のあまり今にも泣き出しそうな一人の下級生を睨み据え、いざ殴りかかろうとする達

也をまあまあとなだめながらも、「お前、確かに止まって見えたわ、少なくとも二十回は足踏みしとったな。ほんでこけるし」と聡は辛辣な一言を放つのだった。やがて冷静さを取り戻したらしい達也は、ひたすらすいませんを繰り返すその下級生に向かい「もうええ、しやあないわ。誰のせいでもないんや」と一声かけると、さっきの怒りのことなどコロツと忘れたかのように聡と冗談を飛ばし合いながら、安堵しやつと笑顔を取り戻したその下級生を引き連れて閉会式に向かったのだった。

*

中学生最後の運動会を境に、聡は高校受験の準備に追われ始め、早々と就職先を決めた達也と組んで何かをすることも、一緒になつて遊ぶこともめつきりと少なくなつていった。二人して渓流釣りに出掛けようにも季節は冬間近、川はすでに禁漁期間に入っていた。

*

やがて年が変わり、聡はただ目前に迫った入試のことだけを考えようと努めた。それでも学校で達也と顔を合わせるたびに感じる妙な気まずさをどうすることもできず、達也もそれを敏感に感じ取ったのか、二人はお互い言葉を交わすことすらしなくなつていった。

そのまま二人は何事もなく中学校を卒業し、聡は新宮へ、達也は西宮へと、それぞれこの土地から出ていった。卒業式の日は級友たち全員が泣いた。もう二度と会えないような、そんな泣き方だった。

*

望みどおり家を出ることができた聡は、一人暮らしの高校生をそれなりに楽しんだ。すべてがそれなりに楽しく、そして同じくらい

つまらなかつた。そんな中途半端な毎日に、聡は初め無性に苛立ちを感じ、やがてそれも消えていった。どこにいても居心地が悪く、何をしても、すべてが退屈だった。その頃、達也がどんな毎日を送っていたのか、聡はこれっぽっちも知らない。この土地を出てから二人が顔を合わすことはめったになかつたし、わざわざ二人で会うともしなかつた。

*

その後、聡は一年間の予備校通いの末、都内の大学に合格し、達也との距離はますます広がることとなった。中学校卒業以来、結局今までに二人が会って言葉を交わしたのは、聡が二十歳の誕生日を迎えた一年前の同窓会の夜と、その翌々日、人っ子一人いない川べりを二人してひたすら釣り上がったあの溪流釣りの一日を含めたとしても、片手にも満たない回数だった。

二人は魚淵にさしかかった。

不気味なほどに暗く淀み、依然として魚淵はそこにあった。盆の最中、今まで人っ子一人いない溪流を先行して釣り上がったいた聡は、とりあえずそこで釣竿を置き、確認するように達也の方を振り返り見た。川の下手からやっと追いついた達也は、そんな聡には構わず平然と釣り糸を垂れる。ひと振り目からいきなり大きな当たりがあり、達也の左手に握られた釣竿が突然ぐぐつと激しくしなり軋んだ。

「さすがに魚淵や。大きいし形もええ、美味そうな小雨やぞ」と達也は、たったいま釣り上げたばかりの小雨を聡に向かって突き出し、「三十五センチは越えとんちゃうか」と羨ましげに眺め入る聡に「お前も釣れよ、ここは結構大きいのおるで」と笑顔で誘う。それでも釣竿を持つとはせず、川原に座り込んだままの聡を尻目に、達也は次々と大物を釣り上げていった。手持ち無沙汰な様子で、上手からじつと達也の姿を眺めていた聡は、次から次へと、それも小雨だけを釣り上げる達也に向かい、さも感心したように言った。

「あいかわらず巧いもんやな。普通こんだけ深い淵やったら、石班魚ばっかり喰いつきそうなもんやのに」

「そんな不味い魚釣つてもしやあないやろ。ちゃんと小雨を選んで釣つとるんじや」

「そんなに巧いこと釣り分けれるもんかね」そう言ってから聡は、ふと中学時代の達也を思い出し、「ほんじゃ、ワニを選んで釣つてくれ」と達也をからかった。その冗談になんの反応も示さず、いま釣り上げた小雨が少し小さいのを見て、流れに半分沈めてある魚籠に入れようか、それとも淵に逃がしてやるうかと迷っている達也に、聡は「逃がしたれよ」と声をかけた。

「そやな」達也は聡の言葉に従い、「今度俺が来るまでに、大きな

つとけよ」と声をかけながら、その小さな小雨を流れに放した。達也の手から離れた小雨は、一瞬のうちに淵の深みの奥へと消えた。

ズボンのポケットから取り出した煙草に火をつけた後、再び新しい釣り餌に手を伸ばした達也を見て、「魚淵で釣りなんぞして、崇りで罰あたるぞ」と言い出した聡に、「お前こそ、お盆やつちゅうのに、寺の息子が殺生してからに」と達也は返す。そういえば、と聡は、釣りはかまわんが殺生はいかんぞ、という今朝の父親の言葉などすっかり忘れ、白米だけを詰め込んできた弁当箱片手に、美味そうに焼き上がった小雨の塩焼きに舌鼓を打った先程の昼食を思い出し、そんな自分たちの行為に少し小気味よさを感じた。「腹八分目か。知らんまに、二人とも大人になつたもんやな」と言う聡に、達也は川面を見つめたまま「なんで？」と聞き返す。

「なんでてお前、中学ん時は二人とも、気分悪なるまで喰いまくつたやんか」聡はそう言いながら煙草を一本取り出してちゃんと口にくわえ、慣れた手つきで火をつけた。

「そう言やアそうやったな」と達也は答え、笑いながら聡の方を振り向き、こつ後を続けた。

「お前ももう二十歳やし、俺もあと二月もしたら二十歳の誕生日や」「達也、お前まだ十九やったんか」と聡は意外そうに言い、「おうよ、まだティーンエイジャーやで」とおどける達也に、「まだ成人してないくせに、生意気に煙草吸うな」とふざけて言った。達也は呆れ返りながら、「俺が煙草の吸い方教えてやったんやないか、中学ん時」と言い、その夜のことを思い出したのか、突然腹を抱えて笑い始めた。

「あれは俺の生涯で最大の汚点やな」そう言いながらまだ長い煙草を川の流れに投げ込んだ聡に向かい、「今日は早よ帰るぞ」と達也は声をかける。「またあの山小屋に泊まっていらよ」と聡は誘つてみたが、「明日からまた仕事や」と達也はあっさり答えた。

「明日から？」聡は驚いて聞き返した。

「おうよ」と達也は一言答えた後、ふいに釣竿を思いきり持ち上げ

た。大きくしなつた釣竿は、しかし曲がつたままの格好でびくともしない。どうやら釣鉤が淵の底に引つ掛かつたようだった。「ちょっと俺の竿持つといってくれ、潜つて鉤はずしてくるわ」そう言つて釣竿を聴に手渡し、魚淵に歩み入るうとする達也の後ろ姿が、聴にあの日の保生を思い出させた。

「待て待て、こうしたら外れるかもしれん」今達也を魚淵に入れてはいけない、そんな思いが頭をよぎり、聴は急いで釣り糸をたくり寄せ、思いきり引つ張つた。「おい、むちゃに引くなよ」膝まで水に浸かつていた達也がそう言いながら振り返つた時、ヒュツと微かな音を立てて糸が切れた。

「お前、今わざと切つたやろ」と半分呆れて達也は言い、悪り悪りと笑つて釣竿を差し出す聴の手から自分の釣竿をひつたくると、ぶつぶつ文句を言いながらも手際よく釣りの仕掛けを直し始めた。聴は達也の用意が終わるのを見計らつて、「そろそろ場所変えんか」と声をかけ、傍らに置いてあつた自分の釣竿に手を伸ばしつ、「今から折り返したらちようどええ時間やろ、お前明日から仕事なんやし」と言つた。

「そうじゃそうじゃ明日から仕事じゃ」と達也は独り言のように呟きながら流れに沈めてあつた魚籠を持ち上げると、「もうちよつと上へ行こか」と言うなり聴を擦り抜け先へ進んだ。

「こんなところで釣りしとつてもええんか？」と聴は心配そうに聞きながらもつられて腰を上げる。

「俺は大丈夫や、今晚車飛ばして帰るから」

「そうか、それで間に合うんやつたらええけど」と聴は言つた後、「でも大変やな。今から帰つても、向こう着くの朝方やろ」と今夜の達也を気遣うように続けた。

「そんなにかからんわ」達也は心配無用とばかりそう言い、「お前もこないだ乗つて知つとるやろ、俺の速いの。西宮ぐらいあつといふまじや」と自信ありげに言う。

聴は一昨日の乱暴な達也の運転を思い出し、「お前むちゃに飛ば

すもんな。でも氣イつけえよ」と注意を促した。

「わかつとる」と達也は軽く答える。

「Ｕターン・ラッシュで車多いぞ」と聡は念を押す。

「わかつとる」

「毎日毎日事故ばつかりの、国道四二（死に）号線やぞ」と聡はちやかすように重ねて念を押す。

「わかつとるって」達也はもう聞き飽きたとばかりそう言い捨て、
「今度は俺から先にいくぞ」と言うなり魚籠を流れに放り込んだ。

それから二人は夕暮れ近くまで釣りを続け、それでも陽が落ち切る前に帰りの自動車に乗り込んだ。寺の前まで迎えに出た聡の母親は、おかずが一品増えたと言って嬉しそうに笑い、晩御飯うちで食べていかんしょ、と達也を夕食に誘ったが、時間がないと達也は断り、「ほんじゃ、またな」と聡に一言声をかけて自動車を始動させた。走り去る達也の自動車を見送りながら、「明日からすぐ仕事なんやと」と聡は言い、そんな聡をからかうように、また今日も山でお泊まりかと思とったよ、と彼の母は答え、「俺も達也も、もう大人やで」と自分の息子が思わずむきになるのを見て、いつまでたっても子供は子供や、とあつさり言い含める。そんな母の言葉にまだ脛齧りの聡は何も言い返せず、仕方なく黙り込み、寺の玄関へと向かった。

盆が終わる明日まで食肉はお預けだという厳格な父の言い付けにより、結局食卓には白米と山菜だけが並ぶこととなった。そんな質素な食卓を眺めながら、聡はふと、自分も明日の朝、東京に帰ろうと思った。そのことを伝えようと顔を上げ、山菜を黙々と口へ運んでいる父の顔を見た時、もしこの場で、自分が今日、達也と一緒にたらふく小雨を食べてきたことを打ち明けたなら、一体父はどんな顔をするだろうか、という別の考えが思い浮かび、聡は思わず苦笑した。そしてその秘密を打ち明ける代わりに、魚淵で次々と大物を釣り上げていた達也のことを、まるで自分のことのように自慢しながら、顔をしかめる両親に向かってその夜何度も話して聞かせた。

その日からちょうど一カ月後、二十歳の誕生日を迎えることなく達也は死んだ。

遠くからかすかに聞こえてくる盆踊りのお囃子の音をとくに聞くでもなく、今日二十一歳になったばかりの聡は、校舎脇の階段に独りぼつんと座っていた。闇の中、寺へと続く細くうねった道に沿って立ち並ぶ、無数の松明の炎があやしげに浮かび上がり、この世のものとは思えぬ美しさで見る者の心を惑わせる。過去の様々な記憶がかつて見たこともない光景と混ざり合い次々と甦り、施餓鬼会に寄り集まった死者の魂がそうさせるのか、人はその幻惑にさえ気づきはしない。毎年のように繰り広げられるそんな夏の夜の奇蹟をただなす術もなくうつろに眺めやりながら、そのとき聡は、一年前の九月、あの冷たい朝の、電話ごしに聞いた懐かしい紀州訛りの静かな嘆声を思い出していた。東京の狭苦しいアパートの一室で、ぐっすりと眠りこけていた聡は、まだ夜も明け切らぬ早朝の電話に少し苛立ちを感じ、受話器を取るなり声高に相手を非難した。聡くん、びっくりしたらあかんよ。そんな聡に、震える旧友の声が達也の死を告げた。

交通事故だった。高速道路を猛スピードで走っていた達也の自動車は、やがて限界を超え、コントロールを失い、中央分離帯を飛び越えて逆車線に突っ込んでいった。対向車線には大型トラック。正面衝突だった。ただ、幸いなことに、相手は軽症で済んだらしい。これだけのことを言い終えると、電話の声はそれっきり黙り込んだ。松明の炎はまだ勢いよく燃え盛っていた。次々と炎に飛び込む夏の虫たちは熱に焼かれ一瞬燃え上がり、赤い火種はやがてふらふらと舞い落ち、地面につく頃にはただの灰に変わっている。ふと聡は、目の前で一瞬のうちに燃え上がり灰になったその夏の虫が達也であるような気がした。聡はことあるごとに達也のことを思い出す自分に気づき、思わず苦笑を浮かべながら煙草に火をつけた。そして思った。青白い光を放つ街灯にやたら群がっている、あの死にそこな

った夏の虫が俺なのだ。そしてずっと昔から、俺は達也になりたかったのかも知れないと。

一年前、もし自分も達也と一緒にあって、魚淵で小雨を釣り上げていたら、今とは違う二十一歳の自分が、ここに座っていたかもしれない。一年ぶりの再会を、二十歳の達也と二人で喜び合っていたかもしれない。そんな有り得もしないことを聡は考え、達也の死さえも“祟り”の一言で片付けてしまう土地の者らに対してなんとも言いようのない苛立ちを感じた。そして今、たった独りでここにいる自分が、彼岸の住人となった達也の目にはどう映っているのか、せめて一言だけでもいいから答えて欲しいと思った。そしてほんの一年前にはなかったというのに、達也と自分の間には、すでもう取り返しのつかない距離が広がっているのだとはつきり悟った。聡は思わず天を仰いだ。夜に浮かぶ、白い月が見えた。聡は、震えた。震えながら、泣いた。歪んだ月が無性に腹立たしく思われ、聡は堅く目を閉じた。止まらない震えの中で、ふと、聡の心裏に、達也の死もただの犬死にだったのだろうか、と、そんな考えが浮かんだ。犬死にやな、蛙。それは、二人で百舌を捕まえ食べた夜、その間抜けな百舌に冬場の餌として、枝に突き刺されたまま置き去りにされた蛙を哀れに思ったのか、呟くようにぽつりとこぼした達也の言葉だった。静かに目を開いた聡は、そんな達也の言葉を心の中で何度も繰り返し誦え、そして犬死にでない死など、この世のどこにもありはしないのだと、強くそう思い直した。俺もいつか死ぬのだろう。年々歳々、ただここに在るといっただけで、ずうずうしくも年を重ねてゆく自分。その存在の傲慢さ。ただ生きているだけの屍。そんな思いばかりが聡の中を駆け巡り、やがて一点に集中してゆく。涼しい風が、聡の頬をそつと撫ぜるように擦り抜けた。そんなに時間が経っていたのか、さつきまですぐ側であんなに勢いよく燃えていた松明の炎も、いつの間にかすっかり燃え尽きていた。

突然ある衝動が聡を襲った。聡はゆっくりと立ち上がり、ライターで松明の破片に火をつけ直すと、再び燃え始めたそれを校舎の壁

に押し付けた。夏の螢のように小さな火種が側壁に残ったかと思うと、乾燥しきつた木造の校舎はいともあっけなく燃え上がった。いまのいま生を受けたその炎は、ばちばちと音を立てながら上へと延び、板壁を伝って見る間に屋根の廂を揺るがし始める。闇を侵し燃え広がる炎の美しさに魅せられ、思わず校舎に歩み寄った聡は、その瞬間やっとならに返った。全身をすっぽりと包み込むようにうねり立ち昇る炎の熱に当てられ、今更のように慌てふためき、目の前の猛火を消そうと躍りになった。水道の蛇口からは物凄い勢いで水が噴き出してくるといふのにそれさえ待ち切れず、聡は裏庭の溜め池の水をバケツの縁まで一杯にすくっては何度もぶっかけた。

火は壁の一部を焦がしただけでなんとか収まった。いざ消してみれば、それは拍子抜けするほどに小さな焦げ跡だった。疲れ切った聡は、すっかり水浸しになった階段に、そつと腰を下ろした。聡はうつむき、もうなにも考えまいと静かに目をつぶった。どおんどおんと規則正しくゆっくりと打ち鳴らされる遠い太鼓の音が、再び聡の耳を静かに打ち始める。そのとき聡の心の内に、なにか不思議なそして懐かしい感情が湧き起こり広がった。達也は今夜も独り眠っているのだ。この闇の向こうにある、すっかり朽ち果てたどこかの廃屋で。聡はそう確信し、今この時、暖かい囲炉裏端でぐつぐつと眠る達也に、ただ幸福な夢だけが訪れるよう心から祈った。

長い間、独りぼんやりと階段に座り込んでいた聡は、ふいに背後から自分の名を呼ぶ声を聞き後ろを振り返り、そこには何者の姿もなく、先の声がただの空耳だと知った。ふと聡は、誰かと言葉を交わしたくなった。どんな話でもいい。誰でもいい。ただ、それは達也ではなかった。聡は笑った。愉快だった。腹の底から込み上げてくる笑いに、聡は、震えた。

遠い太鼓の音が一際大きく鳴り響き始め、矢倉を囲む人々の踊りも佳境に入ったのがわかった。そんな人々の周りで、一緒になって踊り狂う死者の魂が、今の聡にははっきりと見える気がした。聡は立ち上がり、闇に浮かびきらびやかな踊りの輪に向かって、ゆっくり

りと、確かな足取りで歩き始めた。明日あたり、魚淵に小雨でも釣りにゆこうか、そんなことを考えながら、聡は彼方に輝く光炎を見た。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073e/>

魚淵

2010年10月8日15時57分発行